

研究ノート

アダム・スミス博士の死去※

——18世紀スコットランドの新聞紙面を中心に——

京都学園大学 経済学部

渡辺 恵一

I

アダム・スミスがスコットランドの古都エディンバラで没したのは1790年7月17日(土曜日)のことである。スミス没後にかなりの数にのぼる追悼文や回想録が当時の定期刊行物(Periodicals)に掲載されたが、これらは直接的資料に乏しいスミスの人物像を知るうえできわめて重要な手掛かりとなるものであり、それゆえ過去の伝記的著作において大いに利用されてきたと言ってよいであろう。

管見の限りで月刊誌から紹介すれば、1790年7月号にスミスの死亡記事を掲載した *Gentleman's Magazine* は、同年8月号に彼の生涯全体についてかなり詳細な情報を伝える「伝記的回想録」¹を發表している。『道徳感情論』第6版の出版広告が出た *Monthly Review* の1791年2月号には、その前文に頌詞を含む長文の追悼記事²が掲載されている。スミスが没したエディンバラで刊行されていた *Scots Magazine* も、1790年7月号でスミスの物故を報じたが、翌91年2月号において *Monthly Review* 誌のものと同一追悼記事を掲載している³。それ以外で重要なものとしては、ジェイムズ・アンダーソン(James Anderson, 1739-1808)が編集した週刊誌 *Bee, or Literary Weekly Intelligencer* に寄せられた筆名アミクス(Amicus)の回想録⁴(1791年5月11日号)と、それにたいする筆名アスカニアス(Ascanius)の批判的補論⁵(1791年6月8日号)、さらにはデューガルド・ステュアートが1793年1月21日と3月18日の両日にエディンバラ王立学会で読み上げ、1794年の同学会『会報』(*Transactions of the Royal Society of Edinburgh*)に収録された「アダム・スミスの生涯と著作に関する報告」(Stewart: 1793)などを、あげることができよう。ちなみに、*Annual*

※ 本稿は、「資料」として公表した渡辺(1990)の増補改訂を試みたものである。

¹ Anon., "Biographical Memoirs of the late Dr. Adam Smith", *Gentleman's Magazine*, Vol.VL, Part II, August 1790, pp.761-63.

² *Monthly Review, New Series*, Vol.V, Feb. 1791, pp.138-42.

³ *Scots Magazine*, Vol. LII, July 1790, p.363; Vol. LIII, Feb.1791, pp.71-73.

⁴ *Bee, or Literary Weekly Intelligencer*, Vol.III, 1791, pp.1-8, 水田・松原訳 343-62頁.

⁵ *Bee*, pp.164-67.

Register の 1795 年版のスミス回想録⁶は、このステュアートの伝記的著作を再録したものである。

これらの雑誌に掲載された追悼文や回想録は、同時代のスミス評価を明らかにするものとして、今日のスミス研究においてもけっして無視できない資料的価値をもっている。だが、こうした追悼文や回想録は、雑誌としてのメディアの性質上、そのほとんどがスミス没後半年以上たってから発表されたものである。したがって、スミス死去のニュースをいち早く伝えたのは、この種の雑誌ではなくて、なによりもまず当時の新聞紙面においてであったにちがいない。ロンドンの日刊新聞 *Times* は、1790 年 7 月 24 日付でスミスの死去を知らせ、翌 8 月 16 日に「故アダム・スミス博士の伝記的逸話」⁷と題するかなり長文の匿名記事を掲げている。チャールズ・タウンゼントやウィリアム・ピットといった当時の指導的な政治家たちとの人的交流やスミスの知名度を考慮すれば、この間 *Times* と相前後してロンドンで刊行された数多くの日刊紙に、スミス死去に関する何らかの記事が掲載されていたことは想像に難くない⁸。

とはいえ、当時のロンドン＝エディンバラ間の交通・通信事情のもとでは、スミス死去のニュースがロンドンに届くのにある程度の日数が必要であった。『国富論』のなかでスミスは、「二人の御者が乗る、八頭立ての広輪大型馬車は、ロンドンとエディンバラの間を約 6 週間で、4 トンに近い貨物を積んで往復する」と述べ、海路をとって船舶で運んでも往復にほぼ同一日数を要する (Smith: 1976, pp.32-33, (一)45 頁)、と指摘している。もちろん、これは多量の貨物を運搬するばあいのお話であり、馬を使って手紙を運ぶ「騎馬郵便(horse post)」を利用すれば、両都市間の通信にはそれほど多くの日数を必要としなかった。1758 年 4 月号の *Scots Magazine* によれば、ロンドンからエディンバラへ郵送の期間を 10 日半から 7 日間に短縮する提案がなされたとあるから⁹、60 年代になると両都市間の通信に要する日数は 1 週間程度であったと推定される。すでに紹介したロンドンの *Times* は、スミス死去のニュースをちょうど 1 週間後に伝えたわけであるが、しかし、「郵便馬車(mail coach)」の利用が本格的に開始された 18 世紀末ともなると、実際の通信事情はさらに改善されたようである¹⁰。たとえば、スミスの死去を伝えたスコットランドのある新聞紙面(*Edinburgh Advertiser*)には 3 日前の日付のロンドンからの通信文が掲載されていることから、1790 年の時点では、スミス死去のニュースは 3、4 日程度でロンドンに届いたと考えてよいだろう。

⁶ *Annual Register, or A View of the History, Politics and Literature*, 1795, pp.3-21.

⁷ Anon., “Biographical Anecdotes of the Late Dr. Adam Smith”, *Times*, Aug.16, 1790.

⁸ ロスの『アダム・スミス伝』第 2 版 (Ross: 2010, p.439) は、*Gentleman's Magazine* の 1790 年 8 月号に掲載された「伝記的回想録」は、もともと 7 月 31 日付の *St. James's Chronicle, or British Evening Post* から転載されたものであり、またそれが 8 月 9 日付で *Oracle and Public Advertiser* に掲載されていた事実を指摘している。とはいえ、この点に関する研究はまだ手付かずのままといつてよい状態にある。18 世紀イギリスで刊行されていた雑誌や新聞のタイトルを知るためのさしあたりの手掛かりとしては、Grant(1871:1872), Bourne(1887), Crane and Kaye(1927), Morison(1932), Weed and Bond(1946), BL(1975), *Burney Collection* (Online)などを参照。

⁹ Cf. Craig(1931), p.12, esp. note 2.

¹⁰ この点については、星名(1982)、98-103 頁、242 頁の注(12)を参照。

以上に述べた当時の通信事情から理解されるように、スミスの死亡記事がもっとも早く掲載されたのは、ロンドン（首都）の新聞紙上ではなく、その当時スコットランドで発行されていた地方新聞の紙面においてであった。スコットランドの地方紙に発表されたスミスの追悼記事は、いずれも比較的短く、内容の点でとくに目新しいものはないけれども、筆者の知る限りでは、この問題について本格的に調査した文献はなかったように思われる。長らくスミスの古典的伝記として広く利用されてきたジョン・レーの『アダム・スミス伝』(Rae: 1895) や、ちょうど一世紀後にその全面的改訂を試みたイアン・シンプトン・ロスの『アダム・スミス伝』(Ross: 1995; 2010)には、なるほど、その当時エディンバラで発行されていた新聞二紙について言及があるものの、その分析はきわめて断片的で、不十分である。その点については本稿の最後の部分で論じることにした。

II

ロンドンの日刊新聞の隆盛¹¹と比べるべくもないにせよ、18世紀後半のスコットランドには、エディンバラ、グラーズゴウ、アバディーンを中心にしてかなりの数の地方新聞が発行されていた。スミスが亡くなった1790年に、これらスコットランドの三大都市で流通していた代表的な地方紙のタイトルをあげてみよう。

まず、スコットランドの「政治と文化の中心地」であるエディンバラでは、① *Edinburgh Evening Courant* (1718-1886)、② *Caledonian Mercury* (1720-1867)、③ *Edinburgh Advertiser* (1764-1859) の三紙が有力であり、①と②は週3回、③については週2回の間隔で発行されていた。エディンバラは、ロンドンからの情報を集積し発信する「メディア・センター」として機能していたので、以上の三紙はスコットランドの地方紙全体をリードする立場にあった¹²。

次に、「商業と工業の町」として急速な発展を遂げつつあったグラーズゴウでは、④ *Glasgow Journal* (1741-1842)、⑤ *Glasgow Mercury* (1778-1796)、⑥ *Glasgow Advertiser, and Evening Intelligencer* (1748-) の三紙が重要であり、また第三の都市アバディーンでは、⑦ *Aberdeen Journal* (1748-1952) が高い水準を誇っていた¹³。週2回（月・金曜日）発行されていた⑥を除けば、グラーズゴウとアバディーンの各紙は週1回だけの刊行物であり、各地域に固有のローカル情報以外の主要なニュース・ソースのすべてを、エディンバラの情報に依存していた¹⁴。産業革命の開始とともに経済発展の著しいグラーズゴウでさえ、ロンドンからの郵便物を、エディンバラを経由することなく直接受け取れるようになったのは、

¹¹ 比較的新しい海外の研究文献としては、Haig(1960), Werkmeister(1963), Rea(1963), Black(1987), Barker(1998; 2000)を、また邦語文献として大久保(1981)を参照。

¹² とくにエディンバラの定期刊行物の研究としては、今なお Couper(1908)が有益である。

¹³ グラーズゴウの定期刊行物に限定した研究論文として、Couper(1930)がある。*Aberdeen Journal*は現在も出版社名として存続しており、また *Glasgow Advertiser, and Evening Intelligencer*は、今日の *Glasgow Herald* に引き継がれている。Cf. Craig(1931), pp.95, 100.

¹⁴ Couper(1908), Vol. I, pp.70-76; Craig(1931), pp.20-21.

ようやく 1788 年になってからのことであった¹⁵。

さて、私の調査によれば、最初にスミスの追悼記事を掲載した新聞は、1790 年 7 月 19 日付の④ *Edinburgh Evening Courant* である。スミスが亡くなったのは 17 日（土曜日）であり、日曜日に新聞は発行されなかったから、19 日（月曜日）付の同紙がスミスの死去を伝えた最初の新聞だったと考えられる。スミスの終の棲家はエディンバラにあり、このエディンバラがスコットランドの「メディア・センター」であったことからして、この点はまず間違いないところであろう。*Edinburgh Evening Courant* (no.11260)は、スミスの死去を次のように報じている。

「法学博士、ロンドンおよびエディンバラ王立学会会員、スコットランド関税委員、前グラーズゴウ大学の道徳哲学教授であったアダム・スミスは、土曜日に当地で亡くなった。

スミス博士は、現バクラー公爵閣下と大陸旅行に赴くために教授職を辞した。彼の諸著作は、類例をみないほど高く評価され、大ブリテン下院とフランス国民議会の両方において引き合いに出されている。それらの著作は現在広く流布している自由の精神に寄与してきたのであって、フランスとの通商条約の最初の示唆はかれの『国富論』に求めることができよう。」

フランス革命直後のイギリスとフランス両国の議会において議論の対象となった「自由の精神」の普及に、スミスの著作が一定の役割を果たしたことや、とくに『国富論』がフランスとの自由貿易——イーデン条約の締結(1786 年)——という政策面で評価されていたことを、この紙面は物語っている。すでにフランス革命は始まっていたが、エドモンド・バークの『フランス革命の省察』の出版は 1790 年 11 月のことであり、このスミス死去のニュースが書かれた時期には、彼の最初の伝記的作品を発表したドゥーガルド・ステュアートが、「自由貿易論はそれ自体が一種の革命的傾向をもつと主張されていた」(Stewart: 1793, p.339, 邦訳 176 頁)と述べた状況とは異なり、王政廃止や国王処刑の段階にまでフランスの事態は未だ進んでいなかった¹⁶。

この追悼文はまったくそのままのかたちで 7 月 13 日 - 20 日付の⑤ *Glasgow Mercury* に掲載されている。唯一の違いは、*Edinburgh Evening Courant* (no.11260)で、スミスは「当地で亡くなった」とあるのが、「エディンバラ」に書き改められたことだけである。

7 月 16 日 - 20 日付の③ *Edinburgh Advertiser* は、スミスの幼年時代に生じた有名なエピソードを含む、やや長文の追悼記事を掲載している。

「法学博士、ロンドンおよびエディンバラ王立学会会員、スコットランド関税委員、前グラーズゴウ大学の道徳哲学教授であったアダム・スミスは、土曜日にエディンバラで亡くなった。

故スミス博士は、文壇で大いに尊敬を集めた紳士であった。『道徳感情論』と『国富論』は、彼の名前を末代までの名誉をもって伝えるであろう。この著作『国富論』は大ブリテン下院とフラ

¹⁵ Craig(1931), p.20.

¹⁶ たとえば、Meikle(1912), Andrews(2000), Harris(2008)などを参照されたい。

ンス国民議会の両方において特別の賛辞をもって引き合いに出されており、行政当局は、フランスとの通商条約の構想をその著作から得た、と言われている。私生活のかれは、博愛、慈悲、人間性、思いやりの点で際立っていた。」

この追悼文には、『道徳感情論』が明記されていることや、スミスの「私生活」について言及があるなど、① *Edinburgh Evening Courant* のものとはスタイルや内容の違いが認められるので、おそらく執筆は別人の手になるものであろう。この一節につづいて、*Edinburgh Advertiser* の当該号には、スミス幼年時代の周知のエピソードが紹介されている。

「スミス博士の幼年時代に、世間がこの卓抜した学問的才能をあやうく失いかけるという、きわめて特筆すべきエピソードがかれの身に生じた。かれは、カーコーディで一人のジブシーの手によって両親のもとから連れ去られたのである。しばらくかれの探索が効果なくおこなわれたが、そのとき、みすばらしい婦人の手に抱きかかえられ、哀れにも泣き叫んでいる子どもを、路上でみたという、紳士からの情報が寄せられた。ただちに捜索隊がその紳士の語った道路に派遣され、幸運にもその婦人に追いついた。そこで彼女はすぐさま子どもを捨て去ったので、かれはこうして奇跡的に両親と世間のもとに連れ戻された。」

この記事は、スミスが誘拐された場所をかれの生まれ故郷のカーコーディであると報じているが、これは、その後の伝記的作品が伝える事実とは異なっている。ジョン・レーは、この誘拐事件を、スミスが三歳のときに「リーヴン河畔のストラセンドリ (Strathendry) にある祖父の家を訪問したおり」(Rae: 1895, pp.4-5, 邦訳 5-6 頁)の出来事としている。ウィリアム・W・スコットは、誘拐事件が起こった具体的な場所について、デューガルド・ステュアートが「叔父の家の戸口で一人きりで遊んでいたとき」と特定したことに異論を唱えたが (Scott:1934, p.23)、いずれにせよその後の伝記的著作で、本紙面でのカーコーディ誘拐説を採用しているものはない。幼年期病弱であったスミスがよく訪れたストラセンドリは、母マーガレットの郷里であり、二人が暮らしていたカーコーディの近郊に位置するとはいえ、そこから北に 30 マイル以上も離れた内陸にある。したがって、このカーコーディ誘拐説は誤報だと考えるのが至当である。

7月22日付の① *Edinburgh Evening Courant* (no.11261)には、このスミス幼年時代のエピソードが一字一句の違いもなく掲載されており、このエピソードに関する両紙のニュース・ソースが同じであることを物語っている。

Edinburgh Evening Courant (no.11261)と同じく7月22日に発行された② *Caledonian Mercury* は、他紙にみられた「法学博士・・・」以下の経歴紹介を省略し、いきなり「故スミス博士は、現バックルー公爵閣下と大陸旅行に赴くために教授職を辞した」という一節ではじまる追悼記事を掲げている。しかし、それに続く記事の内容は、すでに紹介した① *Edinburgh Evening Courant* (no.11260)と③ *Edinburgh Advertiser* に掲載されたスミス幼年時代のエピソードから合成されており、それ以外の新しい情報はまったく記されていない。

最後に、7月19日 - 23日付の⑥ *Glasgow Advertiser, and Evening Intelligencer* にもスミスの追悼記事が掲載されているが、その文面は、誘拐事件を含む7月16日 - 20日付の③ *Edinburgh Advertiser* とまったく同文である。

III

前項で、1790年に発行されていたスコットランドの地方紙から、エディンバラの三紙とグラスゴウの二紙を調査し、そこに掲載されたスミスの追悼記事を紹介した。④ *Glasgow Journal* と⑦ *Aberdeen Journal* の当該号は未見のままであり、したがって本稿の調査はいまだ暫定的なものであることを、お断りしておかなければならない¹⁷。

しかしながら、その当時スコットランドの「メディア・センター」であったエディンバラの三大新聞と、グラスゴウの二紙については瞥見できたのであるから、その成果を前提として次のような推定をおこなうことは可能であろう。——エディンバラ＝アバディーン間の通信は、当時の郵便事情のもので二日間を要するという状況にあったので、⑦ *Aberdeen Journal* がエディンバラやグラスゴウの各紙に先んじてスミス死去のニュースを報道できる可能性は皆無であった、と言える。また、④ *Glasgow Journal* は毎週木曜日に発行されていた¹⁸から、これもまたスミス死去のニュースを最初に伝えた新聞ではありえない。これら未見の二紙にスミスに関するどのような記事が掲載されていたのか、はなはだ興味深いものがある。しかし、前項で検討したように、当時のニュース・ソースはかなり限定されており、エディンバラがその情報の発信源であった。したがって、未見の二紙にも、すでに紹介したものとほぼ同一の記事が掲載（転載）されていると推測して間違いないであろう。

こうした18世紀スコットランドの新聞紙面に掲載されたスミスの死亡記事に言及した研究は、もちろん渡辺(1990)がはじめてというわけではない。ジョン・レーのスミス伝は、すでに検討したエディンバラの二紙、すなわち② *Caledonian Mercury* と③ *Edinburgh Advertiser* にいち早く言及し、「新聞には二つの短い死亡記事が掲載された。その筆者がかれの生涯について知りえたと思われる事実は、ただかれが幼年時にジプシーに攫われた話——これについては *Mercury* と *Advertiser* が詳しい説明をしている——と、*Advertiser* の指摘する『私生活のスミス博士は、博愛、慈悲、人間性、思いやりの点で際立っていた』という特質だけであった」(Rae: 1895, p.436, 邦訳 542-43頁)、と解説を加えている。しかし、本稿ですでに紹介したように、第一に、① *Edinburgh Evening Courant* がスミスの死去を報じた最初の新聞であったこと、第二に、『国富論』の自由貿易論が「自由の精神」の思想的源泉として同時代に一定の現実的影響をあたえたこと、第三に、幼年時に誘拐された場所がカーコーディとされている誤報にも言及していないなど、レーの伝記的記述は、不正確ではないとしても、きわめて不十分であることは明らかである。

¹⁷ 渡辺(1990)以降で追加された原資料は、⑥ *Glasgow Advertiser, and Evening Intelligencer* である。オンライン資源をも積極的に活用しつつ、できるだけ早期に未見の二紙の調査を進めたいと考えている。

¹⁸ Couper(1930), p.108.

レーの伝記からちょうど 100 年後に刊行されたロスの『アダム・スミス伝』(Ross: 1995) は、レーの作品を今日の研究水準において全面的に書き改めた大作であり、これからスミス研究を進めようとする者にとって座右におかれるべき基礎文献である。2010 年の第二版では大幅な改訂があり、オンライン情報が加わった結果、「18 世紀の新聞と定期刊行物」に関する書誌的情報も飛躍的に充実することになった。にもかかわらずロスは、本稿で調査したスコットランドの新聞紙面のスミス情報について、初版とまったく同様に、「エディンバラでは、*The Mercury* と *The Advertiser* が短い二段落の死亡記事を載せたが、要点は、スミスが子どもの頃ジプシーに誘拐された話だったらしい」(Ross:2010, p.439)と指摘するにとどまっている。ロスの問題点は、「原資料」に直接あたらずに、レーの伝記に全面的に依拠してしまっている点にある。

フィリップソンの『アダム・スミス——啓蒙の時代を生きて』¹⁹ (Phillipson: 2010)は、ロスのスミス伝を補完する意図をもって書かれた作品であるが、スミス死去に関する当時の報道について、次のように指摘している。「スミスの死はほとんど関心を引かなかった。……エディンバラの新聞報道(press)はその出来事をほぼ無視した。他方、ロンドンにおける報道は、1790 年 7 月 31 日付の *St. James' Chronicle* にはじめて発表された、短編で匿名の回想録を流しただけである」(Phillipson: 2010, pp.274-75)、と。

だが、本稿で紹介したように、「エディンバラの新聞報道はその出来事をほぼ無視した」とするフィリップソンの指摘は、レーに全面依拠したロスの記述をさらに矮小化したものであり、これは事実とまったく異なる主張だと言わなければならない。また、本稿では省略した引用箇所、フィリップソンは、レーやロスの前例に倣って、「私は、当地でスミスの死去がほとんど感銘を引き起こさないのを見て、驚くと同時に少々腹立たしく思っています」(Romilly: 840, i, p.404)という、サミュエル・ロミリー(Sir Samuel Romilly, 1757-1818)の書簡を、当時の世論がスミスの死去に冷淡だったことを示す有力な典拠として引き合いに出している。スミス自身が「つねに『国富論』よりも『道徳感情論』をはるかに優れた著作だと考えていた」証拠資料として参照されることが多いこの書簡は、1790 年 8 月 20 日にロンドンで書かれたものである。本稿の冒頭で論じたように、当時のロンドン＝エディンバラ間の通信事情や、さらにはロンドンで刊行されていた各種の定期刊行物の性質から、イングランドとスコットランドの間で 1 ヶ月から半年程度の情報伝達上のタイムラグが生じるのも、これはやむを得ないことである。ロンドンで刊行されていた新聞や定期刊行物の調査がさらに進めば²⁰、もちろんロミリーがいう 1784 年に亡くなったサミュエル・ジョンソン博士とは比べるべくもないにせよ、スミス死去のニュースはスコットランドの知識人としては異例な頻度で報じられていることが判明すると思われる。実際「大いなる旅立ち」を論じたロスの伝記の初版と二版とを比較するだけでも、スミスに関する情報量の増加に著しいものがあることが明ら

¹⁹ 本書については、書評(渡辺: 2012), 34-36 頁を参照。

²⁰ 例えば注 8 でロスが指摘した新聞誌以外に、さらに *General Evening Post* と *Public Advertiser* の 1790 年 7 月 24 日号にスミスの追悼記事が掲載されている。

かになるはずである。

【Eighteenth-Century Newspapers and Periodicals】

Aberdeen Journal

Annual Register, or a View of the History, Politics and literature

Bee, or Literary Weekly Intelligencer

Caledonian Mercury

Edinburgh Advertiser.

Edinburgh Evening Courant

General Evening Post

Gentleman's Magazine

Glasgow Advertiser, and Evening Intelligencer

Glasgow Journal.

Glasgow Mercury

Monthly Review, New Series.

Oracle and Public Advertiser

Public Advertiser

Scots Magazine

St. James's Chronicle, or British Evening Post

Times

【Reference】

Andrews, S.(2000), *The British Periodical Press and the French Revolution, 1789-99.*

Burney Collection of 17th and 18th Century Newspapers. (Online)

Barker, H.(1998), *Newspapers, politics, public opinion in late eighteenth-century.*

——— (2000), *Newspapers, politics and English society, 1695-1855.*

BL(1975), *Catalogue of the Newspaper Library in Colindale.*

Black, J.(1987), *The English Press in the Eighteenth Century.*

Bourne, H.R.F.(1887), *English Newspapers: Chapters in History of Journalism,* 2 vols.

Craig, M.E.(1931), *The Scottish Periodical Press 1750-1789.*

Crane, R.S. and F.B. Kaye(1927), *A Census of British Newspapers and Periodicals 1620-1800.*

Couper, W.J.(1908), *The Edinburgh Periodical Press,* 2 vols.

——— (1930), "The Glasgow Periodical Press in the Eighteenth Century", *Record of Glasgow Bibliographical Society,* Vol. VIII.

Grant, J.(1871), *The Newspaper Press: Its Origin, Progress, and Present Position,* 2 vols.

- (1872), *The Metropolitan Weekly and Provincial Press*.
- Haig, R.L.(1987), *The Gazetteer 1735-1795: A Study in the Eighteenth-Century English Newspaper*.
- Harris, B.(2008), *The Scottish People and the French Revolution*.
- Meikle, H.W.(1912), *Scotland and the French Revolution*.
- Morison, S.(1932), *The English Newspaper: An Account of the Physical Development of Journals Printed in London 1622-1932*.
- Phillipson, N.(2010), *Adam Smith: An Enlightened Life*.
- Rae, J.(1885), *Life of Adam Smith*. (大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』、1972年)
- Rea, R.R.(1963), *The English Press in Politics 1760-774*.
- Romilly, S.(1840), *Memoirs of The Life of Sir Samuel Romilly: with a Selection form His Correspondence*, 3 vols.
- Ross, I.S.(1995), *The Life of Adam Smith*. (篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』、2000年)
- (2010), *The Life of Adam Smith, Second ed.*
- Scott, W.R.(1934), *Adam Smith as Student and Professor*.
- Smith, A.(1976), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, eds. by Campbell, R.H. and A.S. Skinner. (水田洋監修訳『国富論』全四冊、2000-01年)
- (1983), *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, ed. by Bryce, J.C. (水田洋・松原慶子訳『修辞学・文学講義』、2004年)
- Stewart, D.(1793), “Account of the Life and Writings of Adam Smith, L.L.D.”, in Adam Smith: *Essays on Philosophical Subjects*, eds. by Wightman, W.P. and J.C. Bryce, 1980. (福鎌忠恕訳『アダム・スミスの生涯と著作』、1984年)
- Werkmeister, L.(1963), *The London Daily Press 1772-1792*.
- Weed, K.K. and R.P. Bond (1956), “Studies of British Newspapers and Periodicals form their Beginning to 1800: A Bibliography”, *Studies in Philology*, Extra Series, No.2.
- 大久保桂子(1981)「成立期イギリス・ジャーナリズムに関する覚え書き」、『西洋史学』124
- 星名定雄(1982)『郵便の文化史——イギリスを中心にして』
- 渡辺恵一(1990)「(資料) スミスの追悼記事について——18世紀スコットランドの新聞紙上より」、『京都学園大学論集』19-3
- (2012)「(書評) Nicolas Phillipson, *Adam Smith: An Enlightened Life*, Allen Lane, 2010」、『イギリス哲学研究』35